

KISHIDA, K. On a fruit bat called "Yaku Komori"

所謂ヤクカウモリの本體に就て

岸 田 久 吉

東京市外瀧野川町西ヶ原 農事試験場内

農林省畜産局鳥獸調査室

(昭和四年十一月二十日受領)

目 次

1 ヤクカウモリなる名稱の史的回顧—2 現今屋久島には大蝙蝠を産せず—3 昔屋久島に居たかと誤られる種類はエラブオホカウモリであらう—4 牝に於けるエラブオホカウモリとヤヘヤマオホカウモリの差別—5 牝に於ける此の兩種の區別—6 昔と今の *Pteropus dasymallus* —7 文献目録

1. ヤクカウモリと云ふ名稱の史的回顧

1891 (明治24) 年 7月22日出版の日本動物總目録有脊椎部 p. 118 に於て著者岡田信利氏は *Pteropus dasymallus* TEMMINCK, 1825 に對して、ヤクカハホリなる和名を用ひられた。此の和名は恐らく同氏の所命であらう。

1909 (明治42) 年10月25日發行の動物學雜誌 Vol. 21, No. 252, p. 453 に於て波江元吉氏は奄美"大島に於て購入す。併し、本島産にはあらず"との説明を附した、ヤクガワホリ *Pteropus dasymallus* を掲げられて居る。

1913年青木文一郎氏は其の著"目録"に於て *Pteropus dasymallus* TEMMINCK, 1825 [此目録には 1827 とある] に和名 Yaku-kōmori を用ひられた。而して其の分布地としては1901年のバングス氏の報告に據つて、琉球を擧げて居られる。同じく1913年同氏の"分布狀況"に於て此を邦文で記されて居る。

1920年黒田長禮氏は“南洋産哺乳類”に於て *Ptoropus dasymallus* を附記し、アンダーセン氏 (1912) の検索表を索引と題して抄出した後ヤクカハホリ (青木氏) と記されて居る。此青木氏とあるのは前記の通りの事情であつて誤故、岡田氏と訂正すべきものである。

1924年小生は圖解初版 1926年同書再版に於てヤクカウモリをヤヘヤマオホカウモリの異名として取扱つた。

因みに記す。黒田氏が和名ヤヘヤマカハホリを波江氏の命名かと思はれて居る (1920 動雜 Vol. 32, No. 380, p. 204) のは、文献のしらべ方が足らぬためであつて、波江氏の命名ではなく、古く新井白石の南島志〔1719—享保4年5月下濤と記してあるところのもので明治39年1月に吉川半七發行新井白石全集第3巻の内にも収載してある。カウモリ……八重山に産する者其形極大 俗名八重山蝙蝠云々〕に既に載つて居る名稱である。此結論は“圖解”に明記しておいたが、説明を省いて居たから、此所に其の顛末を附記させて頂く。

2. 現今屋久島には大蝙蝠を天産せず

ヤクカウモリなる和名が“屋久島に棲息するもの”との断定にもとづいて與へられたものであることは疑無い。而も日本産哺乳類に關する近來の研究者は、歐米人たると日本人たるとを問はず、一人も屋久島からオホカウモリを得て居らぬ。黒田氏が先年琉球島弧の鳥あつめの序に哺乳類をも採集させて居られたが、やはり取れなかつた事實を知悉して居る。又1828年中村幸雄氏が鳥卵あつめを同地方に行はれた時、多方面に興味があり、親切な同君のこととて、此にも注意されたが遂に手に入れられなかつた。本年また小生鹿兒島縣保安課に依頼して同縣下に於ける大蝙蝠の棲息狀況を徹底的にしらべてもらふことにしたが、屋久島には古來大蝙蝠を天産せざることが明かにされた。これは今日の所、斷定的な知見である。ヤクカウモリ屋久島に棲息せず……何と云ふこまたことになつて來たのであらう！

3. 昔屋久島に居たかと誤られる種類はエラブオホカウモリであらう

鹿兒島縣保安課技師山形頼治氏は官命を受けて同縣下の大蝙蝠調査を實行された功勞者である。同氏は本誌 Vol. 1, No. 8, pp. 125—128 に小生が英文で發表した通り、屋久島のすぐ西隣の一小島から、新稱エラブオホカウモリを採集せられた。その一小島、名は口之永良部島である。屋久島の西北端なる永田岬から此の一小島の東南端までは 12 Km… 約三里に足りない距離である。其所から大蝙蝠が採集せられた。學界に對するエラブオホカウモリ、*Pteropus yamagatai* KISHIDA, 1929 の發見は山形氏に依つて遂げられ、其の動物學上の貢獻は頗る大なるものである。小生は其の寄與の大きいことを申述べ、鹿兒島縣保安課長及山形技師に對して深く謝意を表する。

由來日本の（陸棲）動物區系は三帶に別たれる。北帶・中帶・南帶と云ふ。北帶と中帶とは全北地方系に屬し、北帶は主としてシベリア亞地方、中帶は滿州亞地方を代表して居り、前者は北方型、後者は南方型の動物を主要分子とする。而して南帶は東洋地方系に屬し、主として印度・支那亞地方的の動物、即ち、最南型を産する。九州南部から臺灣にかけての地方は此の中帶と南帶との區別點、更に大きく云へば全北地方と東洋地方との區界線を含む。斯様な意味から此地方の動物をしらべる分類學者は事大思想とか……とか云ふものを離れて虚心坦懷で以て研究結果を公表してほしいのである。青木氏が“分布狀況”に於て此區界線を屋久・種子と奄美大島との間にひかれた功績に依つて、昆蟲學者江崎悌三氏は此所を青木線と命名された。併し、同氏は昆蟲の分布からは、青木氏の主張された哺乳類に於ける様な重大な分布上の意義あるものでないと云つて、九州と屋久・種子との間に其の重大な意義ある區界線を設け、三宅恒方氏によつて、別に三宅線と云ふ名を與へられて居る。小生（1925）は専ら哺乳類をしらべた結果、江崎氏の所謂、青木線の方が重大なものと認め、青木氏の結論を裏書したものである。青木線の命名に先立つてと云ふよりも青木氏自身の發表よりも以前から此地點に斯様な意義あることは渡瀬庄三郎先生が東大の講義其の他講演等に於て發表されて居たさうであつて、そのことは先生の在世中、度々小生等が承つた所であるし、又、小生自身、先生のお話を聞かぬ内から科學世界に出た講演筆記やホルムグレン氏の日本産シロアリ論文（1912—動物學彙報

Vol. 8, pt. 1, p. 107) の脚註等に依つて、先生の説は知つて居たことである。其の後蛙の分類から岡田彌一郎氏 (1927) も此の青木線に重大な意義ありとして、渡瀬線の名を再び與へた。今日此の意義の區界線に對し、青木線・渡瀬線・又は渡瀬青木線、或は地理學的に川邊海峽・七島灘の名が用ひられて居る。

大蝙蝠は事新しく書く迄も無く最南型の動物である。山形氏の發見は 1) 著しい此の最南型動物を正確に學界に紹介するものである點 2) *Pteropus dasymallus* ヤヘヤマカウモリにからまる歴史的難問を解決するものである點

3) 青木線を越えた更に北方の地帯に最南型を立證した點 4) オホカウモリ屬分布の北限を明かにした點……等に於て、少く共日本の動物學界に非常に貴重な貢獻をしたものと言ふべきである。

さて屋久島に大蝙蝠が居たと云ふ記録は随分古い。此所に書かぬ様な古い日本語の文献も恐らくは有るのであらう。他日文献にくはしい方やお氣付きの篤學の士に教へていただきたい。小生の知り得た所は次の通りである。

1824 年日本關係で有名なシーボルト氏が長崎及江戸からとして *Pteropus rubricollis* と云ふ學名の下にオホカウモリ一種を記して居る。翌年 1825 年テンミンク氏は日本に古くから居留するオランダ人ブロムホフ氏がライデン博物館へ送つた一標品によつて、皮毛が厚く羊毛狀であると云ふところから、*Pteropus dasymallus* なる新學名を考定し、シーボルト氏の記事に據つて産地は長崎江戸を挙げたに止まる。然るに東京や長崎には大蝙蝠は天産しない。即ち此の *Pteropus dasymallus* は正確な天然の産地を伴はざる原記載の所有者である。其の後 DESMAREST (1827) GEOFFROY (1828) FISCHER (1829) WAGLER (1830) LESSON (1836) GRAY (1838) OKEN (1838) TEMMINCK (1839) SCHREBER (1839) [實際は WAGNER 氏] 諸氏が此の大蝙蝠の名を挙げ、産地をテンミンク氏に従つて日本とか江戸・長崎などと書いて居る。

1842 年シーボルトの Fauna japonica 哺乳類篇に於てテンミンク氏は *Pteropus dasymallus* は専ら九州島の南部・薩摩の國に産し、且つ甚だ稀に Jakunoshima にも産すると書いて居り、又、和名としてリウキウカウモリを紹介して居る。大蝙蝠が屋久島に居ると歐文で書いた最初が此の記録である。此種の

産地としては爾後、江戸・長崎・本州・九州・屋久島が挙げられる様になつた。其内 屋久島を挙げて居るのは SCHINZ (1845) PETERS (1862; 1867) の二氏である。

然るに近來は屋久島から大蝙蝠は採集されないし、又、棲息することも聞かないのである。エーマン氏 (1892) やトルーサル氏 (1897; 1904) ボンホート氏 (1902) は琉球を以て *Pteropus dasymallus* の産地として記す様になつた。産地の確實な標品を近頃入手して *Pteropus dasymallus* を記録したのは BANGS (1901) ANDERSEN (1912) 及小生 (1924; 1926) の三人だけであるらしい。此内でアンダーセン氏は石垣・西表・與那國・小濱諸島産の牝牡を親しくしらべ、詳かに記載して居り、今日では實際一般に同氏の記載をとらして、*Pteropus dasymallus* を知ると云ふ位である。

度々記す通り、實際屋久島には大蝙蝠が棲息して居らず、近所の口之永良部島に於てエラブオホカウモリが見出されたのであるから、所謂ヤクカウモリがヤヘヤマオホカウモリでなくて、エラブオホカウモリではあるまいかとは誰しも思ひつくところであらう。

4. 牡に於けるエラブオホカウモリとヤヘヤマオホカウモリの差別

大蝙蝠の種類の區別は牡でつける方がわかり易い、次に問題の兩種の牡を比較してみよう。

エラブオホカウモリ	比較點	ヤヘヤマオホカウモリ
黒 色	1 吻	暗 褐 色
黒 色	2 頭 上	褐 色
褐 黒 色	3 耳 間	乳 黄 色
前端は褐黒色にて明確に區劃され、後端も後曲線を描いて稍判然と區別され 頸環は黄色	4 頸環背部	耳間から肩まで乳黄色
焦茶色兩側と後方とは黒色	5 胴 背 部	一様に淡い褐黒色
黒 色	6 頤	暗 褐 色

前端も後端も直截されて居り 環形が明瞭である 殆ど一様に褐黒色 中線上に黄條は全く認められぬ 但し往々灰白毛がある	7 頸環腹部 8 胴の腹面	前端は判然直截されて居る 後端は中線上にひろい縦の條斑を作つて居る 陰莖までの前方中線には前項の黄條が在る 兩側と後方は焦茶色
---	-----------------------------	---

黒田氏命名のダイトウジマオホカウモリは原記載でみると、ヤヘヤマオホカウモリと非常にちがふとあるけれ共、見せて頂いたところでは“ほんの少ししかちがつて居ない”と感じたのであつた。あれでも別種としてある。エラブオホカウモリはそこへ行くと實に容易に區別のつく良い種である。

5. 牝に於ける此の兩種の區別

エラブオホカウモリの牝はヤヘヤマカウモリの牝と一見で判別することはむつかしい。昔のあらつばい見方や記載や圖書では區別されなかつたであらうと思ふ。次に些細な比較を示す。

エラブオホカウモリ	比較點	ヤヘヤマオホカウモリ
黒 色 前方黒色 後方は美しい焦茶色 光澤強く 地はクリームパツプである 一様に灰褐色である 黄を帯びない 灰 白 色 一様に灰褐色 中條は全く認められぬ 脊が明るく茶ばみ 腹が暗い灰褐色で明かに二色性である	1 吻 及 類 2 頭上及耳間 3 頸環背部 4 胴 背 5 頸環腹面 6 胴の腹面 7 尻 觀	淡い暗褐色 淡い黄褐色 光澤の無い乳白色に僅かに黄を帯びる 前方に濃く 後方に淡い 且つ少しく黄ばむ 多少 特に兩脇が黄ばむ 殆ど一様に茶褐色 往々中條(淡色)を見る 二色性は認められるが 背が黄ばみ 腹は茶ばむ

以上の外皮毛の性状・頭骨・齒及各部の測定などにも、微細な差異が認められるが、此所には略する。

6. 昔と今の *Pteropus dasymallus*

今日小生は *Pteropus dasymallus* ヤヘヤマカウモリを八重山諸島等だけのものと局限し、又、*Pteropus yamagatai* エラブオホカウモリを口之永良部島だけのものとして考へて居る。併し、大蝙蝠は愛玩動物として飼養されるもので、サツマイモやリンゴ・カキ・ナツメ・ミカン等の果實を與へておけば割合長く生きて居るものであり、又、能く馴れるものであるから、八重山地方や口之永良部あたりの大蝙蝠が長崎・鹿兒島などにもたらされ飼養されて居たことに不思議は無い。口之永良部を屋久島と云つたところで、此も少しく離れた地方の人としては無理もない誤であらう。斯様な大蝙蝠が繁華な京都・大阪或は將軍家のお膝元たる江戸にもたらされたであらうことも考へ得られる範圍の出来事である。

此の兩種の牝に於ける區別が相當にむづかしいことは前項記載のとうりである。色彩が見事でも性質が荒い牝が比較的少く飼はれ、美しさは遙かに劣つて居ても溫順で飼ひ易い牝が多く飼はれ、方々にもたらされたことはあたりまへである。學問的に一々産地や來歴をたしかめない愛玩飼養家の間や舊時代の學者間で兩種をどつちやにして居たところで此を無理とは云ひ得ないと思ふ。故に小生は 1) 昔の *Pteropus dasymallus* には *Pteropus yamagatai* を含んで居たらしいが、今日は局限して前者は南琉球産だけにあてることにする。従つて前者の和名は古くからある名を少しもじつただけのヤヘヤマオホカウモリを用ひる。2) 屋久島に大蝙蝠は居ないからヤクカウモリ〔ヤクシマオホカウモリ……〕は廢棄する。3) ヤクカウモリと呼ばれたものはエラブオホカウモリであつたと見て大きな誤はない様である”と云ふ三つの結論を以て此の小篇を終ることとする。

7. 文 献 目 録 (印刷上の都合に依つて歐文のものを略す)

1719 新井君美 南島志

189I (六月) 石川千代松・岩川友太郎・松浦歡一郎 帝國博物館天產部動物標

本目録〔P. 2 にヤヘヤマカハホリ……琉球と記す〕

1891 (七月) 岡田信利 日本動物總目録 有脊椎部〔P. 118 に屋久の島
Fauna Jap. ヤクカハホリと記す〕

1909 (十月) 波江元吉 沖縄及奄美大島の小獸類に就て 動雜 Vol. 21, No.
252, PP. 452—457.

1913 (十月) 青木文一郎 本邦に於ける哺乳動物の分布狀況 動雜 Vol. 25,
No. 380, PP. 498—517.

1914 (五月) 岸田久吉 日本の生物地理學

1920 (六月) 黒田長禮 綴山氏採集南洋産哺乳類 動雜 Vol. 32, No. 380.

1921 (十二月) 江崎悌三 日本に於ける昆蟲の地理的分布とその境界線に就
て 動雜 Vol. 33, No. 398, PP. 444—466.

1924 (十月) 岸田久吉 哺乳動物圖解 (初版)

1925 (五・六月) 岸田久吉 動的及立體的に見たる日本産陸棲脊椎動物の分
布論 東洋學藝雜誌 Vol. 41, No. 505, 506, PP. 57—68, 131—144.

NAKAMURA, Y. On the north eastern limit of distribution
of a butterfly, *Papilio helenus niconicollens*.

モンキアゲハ筑波山に産す

中 村 倭

モンキアゲハ *Papilio helenus niconicollens* BUTLER, 1882 は. 本州. 四
國. 九州. 琉球 (松村氏, 宮島氏) 及臺灣 (松村氏) に産するものにして, 本
州にては, 神奈川縣三浦半島 (富岡附近) 以南の地に産す. 然るに最近畠山久
重氏より茨城縣筑波小學校所藏同地産標品の寫眞を拜見したれば同小學校へ照
會したところ 昭和四年八月十六七日頃, 筑波山上男體山と女體山との中間
の草原にて捕獲したるものなる由返事ありき. 依りて同地にも該蝶の産するこ
と確實となれり. 唯今のところ此の蝶の分布上東北端と云ふべきものなるべし